

資料4

2014 年度後期学校ボランティア活動レポート集

(湘南ひらつかキャンパス)

目 次

土屋小学校

- | | |
|-------------------------|-------------------|
| 1. 学校生活における児童の安全について | 小林 将人 313 |
| 2. ボランティアとして学べたこと | 石井 優 314 |
| 3. 今までの経験から小学校の現場で感じたこと | 高萩 貴博 315 |
| 4. 学校で生活する人々を支える | 西村 義樹 316 |
| 5. 子どもたちの考え方を大事にする | 川尻 みほ 317 |
| 6. 先生と大学生 | 横山 貴裕 318 |
| 7. 考えさせることの大切さ | 磯部 莉菜 319 |
| 8. 今まで感じたことのない学校 | 持田 茂樹 319 |

土沢中学校

- | | |
|------------------------|-------------------|
| 9. 生徒が描く教師像 | 水戸 紘子 321 |
| 10. 今の中学生を見て学ぶこと | 平野 晃 322 |
| 11. 信頼される教師とは | 上原 竹雄 323 |
| 12. 生徒側・教師側を経験して | 松本 一宏 324 |
| 13. 2年間の経験で得たこと, 考えたこと | 高橋 雄亮 324 |
| 14. 教えることの美しさ | 山本 直樹 325 |
| 15. ボランティアで見えたもの | 北 丈一郎 326 |

16. 臨機応変な授業の展開	高田 篤司	・ ・ ・ ・ 327
17. 初めて知った先生の姿	栗山 夏美	・ ・ ・ ・ 328
18. 責任と積極性	指旗 和也	・ ・ ・ ・ 329
19. 先生の視点・生徒の視点	高橋 尚大	・ ・ ・ ・ 330
20. 教わる立場から、教える立場 ～生徒から教師へ～	橋田敬一朗	・ ・ ・ ・ 331

秦野曾屋高等学校

21. 子どもとの信頼関係	宮坂 涼	・ ・ ・ ・ 332
22. 反省点	大月あゆみ	・ ・ ・ ・ 333
23. コミュニケーションの大切さ	中尾 真穂	・ ・ ・ ・ 334
24. 生徒に関わる人としての課題	丸山彩恵子	・ ・ ・ ・ 335
25. 生徒とふれあう大切さ	湯地 弘季	・ ・ ・ ・ 336

土屋小学校

1. 学校生活における児童の安全について

生物科学科 科目等履修生 小林 将人

今回、私は時間的に余裕があったので、平日の9:30～15:30の間の約6時間、毎日学校ボランティアに参加することができた。活動では、おもに3～5年生の算数や5年生の理科の実験、1・3・4・5年生の図工の手伝いを行った。また、授業以外に校務作業の手伝いを行ったり、先生方と一緒に下校指導に出たりした。

ほぼ一日教育現場に身を置くことができ、これまでの活動以上にいろいろな事を学ぶことができた。その中でも、児童の安全への配慮に関する意識の変化が、私の中で一番大きなものであった。この安全に対する意識は、手伝いに入った授業の中では特に図工で、また、授業以外の学校生活や下校指導のときの児童の行動から考えさせられるものがあった。

1年生の図工の時間に入ったときは、季節はちょうど秋だったので、ドングリを使った工作活動を行っていた。その活動の中で、児童はドングリに穴をあけて爪楊枝を刺し、コマを作ったりしていた。このドングリに穴をあける作業には錐を使うので、見ているこちらとしてはとても不安になるものがあった。1年生はまだ危険な事を自覚することができていないため、錐の先端が他の人の方を向いてしまったり、キャップをしないで放置したり、人に貸すときも持ち手ではなく針の方を向けて貸そうとしたりと、見ていてゾッとすることがたびたびあった。

4年生の図工の時間では、カッターを使った作業を行っていた。刃を出した状態で人に向けるといった行動をする子はいなかったが、刃を

出しっぱなしで少しの間机の上に放置したり、刃を必要以上に出して作業したりする子がいた。

1年生は危険なことを自覚しておらず、自分に対しても他者に対しても危険なことをしてしまう可能性がある。中学年になると他者に対する安全への配慮は出来るようになるが、自分自身に対する安全への配慮がまだ足りないと感じた。このような、道具を使う上での児童の安全には教師が注意深く目を光らせ、その都度厳しく注意していくことが大切である。その繰り返しにより安全への配慮が身に付いてくると学んだ。

季節が冬になるとストーブを出すのが、このストーブにも当然ながら危険が潜んでいる。児童がストーブに必要以上に近づかないよう、周りに立ち入り禁止の目印のビニールテープを貼ったり、コードに足を引っ掛けないようにガムテープを上から貼ったりするなどの安全対策がみられた。このストーブに関する安全対策は、私の小学校時代にも同じことをしており、この対策は絶対に必要なものであると実感することができた。また、ストーブを点けると当然ながら換気が必要であり、そのような健康上の配慮も必要であると改めて学んだ。

ボランティア先の小学校の通学路は道が狭い。歩道が車道より一段高くなってはいるがガードレールはないため、児童が誤って歩道から車道側に落ちた場合は最悪のケースも考えられる。そのため、登下校中に車道のそばでふざけると、とても危険である。車通りが少なくなるところまで下校指導で児童を送った。少し目を離すと2列3列になって車道に近い所を歩く児童がいたので、その都度、車道側は危ないと注意した。低学年だけの下校の時は教師が下校指導として途中まで送ることで、安全を確保する必要があると感じた。

以上のように、学校生活の中でも危険な事は割と多い。それ故に、教師が多種多様な危険に敏感になり、児童が安全に学校生活を送れるよ

うに気を配ることがとても重要である。このことを今期の活動で学んだ。

2. ボランティアとして学べたこと

化学科 4年 石井 優

私は10月から12月の毎週金曜日、9:30から13:40まで土屋小学校の学校ボランティアに参加しました。主に、校務作業のお手伝い、算数や生活科の授業の補佐などをやらせてもらいました。その3ヵ月の活動の中で特に印象に残ったことを4つにまとめたいと思います。

1つ目は、用務員さんの日々の活動のおかげで、児童が毎日安全に気持ちよく学べる環境が作られているんだと改めて感じる事が出来たことです。授業の補助以外の時間は、用務員さんと一緒に様々な校務作業を行いました。花の植え替え、腐葉土作り、通学路の落ち葉清掃など多種多様な手伝いをしました。普段、1人でこれだけのことを行うのは大変だと思いました。児童が授業を受けている間も、いろいろな人が学校を支えているんだと気づくことが出来ました。また、休み時間や校舎外で活動するような授業のときには、さりげなく児童のことを見守ることができる作業を行っているのが印象的でした。

2つ目は、集団の中で生活するための心得を先生がしっかりと教えていたことです。1年生の授業の際でも、何か自分の意見を言うときには挙手して発言し、誰かが発言しているときは、きちんと聴く姿勢ができていたことに正直びっくりしました。クラスとして1つにまとまっていくためには、相手の意見をしっかりと聴くことができ、自分の意見もはっきりと言えるクラスの雰囲気づくりが重要だと思っているので、担任を持ったときの手本にしたいと思いました。小学校1年生から集団生活におけるルールをきっちりと指導している担任の先生をみ

て、とても勉強になりました。

3つ目は、素直に興味・関心を持つことの大切さです。4年生の算数の図形を使った問題や、1年生の生活の授業でどんぐりを使った作品を作っているときに、「どうしてこうなるんだろう」とか「もっとこうすればよくなるんじゃないか」など学習活動に対して素直にそして真摯に向き合っている姿が多く見られました。中高生になると自分の意見や関心を話せない生徒が多くなる現状の中で、児童たちから、自分が感じた疑問や興味・関心を素直に発信することの大切さを学ぶことが出来ました。そして、将来教壇に立ったときに、意見や疑問を発言できる場や授業づくりをします。

4つ目は、「待ち」の姿勢で見守ることの難しさです。3つ目の素直に興味・関心を持った児童への対応の反省点でもあるのですが、「先生わかんな〜い」と言われるとどうしてもすぐにヒントを出してあげたくなるのですが、そこは一步我慢をして、自分自身で考える時間を作ってあげることが重要だと思いました。自分がすぐにヒントを与えてしまったら、児童は喜び、更にやる気ができるかもしれません。でもそれでは本当の学力は身につけません。わからない問題があるからこそ、間違えてもいいから思考錯誤しながら問題に取り組むことが大事だと改めて気づくことが出来ました。「わからないから諦める、人にすぐに聞くのではなく、わからない問題を抱える楽しさ」を教壇に立って伝えていきたいなと思いました。

私の夢は、「夢と笑顔に溢れた教室と幸せに満ちた家庭を作ること」です。大学を卒業し、来年からの教員生活でこの夢に一步でも近づけるよう、この経験を生かします。

最後に、このような貴重な経験をさせてくださった土屋小学校の先生方・児童の皆さんに感謝いたします。

3. 今までの経験から小学校の現場で感じたこと

生物科学科 4年 高萩 貴博

学校ボランティア活動として、平塚市立土屋小学校に行ってきました。自分は、主に金曜日の午前中の9:30～13:10までの2・3・4校時と昼休みにボランティア活動をしました。学習支援としての活動では、1～5年生の授業での補助を行いました。ほとんどが算数の授業の補助で、先生が教科書の問題やプリントの問題を解くように指示したときに、机間指導を行い、分からなそうにしている児童や困っている児童のところに行ってどうやって問題を解くかを教えたり、間違っている答えを直したりしました。ときには、児童といっしょに英語の授業に参加したり、生活科の授業で物を作ったりしました。学習支援といっても、ただ教室の後ろに立って、小学校の先生の授業の様子や児童の授業を受けている様子を見学することもありました。また、学習支援以外の活動では、子どもたちのために教室の整理整頓を行ったり、用務員さんと一緒にパンジーの植え替えや落ち葉掃きを行ったりしました。給食の時間は毎回1年生と一緒に給食を食べました。

2年前に初めて学習ボランティアに参加して、中学校の現場で授業の補助を体験し、教員の仕事を勉強させてもらいました。今年、高等学校の現場で教育実習を体験させてもらいました。そして、今回の学校ボランティアで小学校の現場で様々な貴重な体験をさせてもらいました。今回の学校ボランティアで、大学生の間に小学校、中学校、さらに高等学校の現場に携わることができました。そこで、中学校と高等学校の現場とは異なる、小学校の現場だからこそ感じたことをまとめます。

まず、最初に感じた小学生の印象は好奇心旺盛かつ元気、そして素直であるということでした。初めて土屋小学校に行ったにもかかわらず、

児童がいきなり「遊ぼう」や「こっち来て」などと言ってくれました。何と話しかければよいかわからないと悩んでいて緊張していた自分がとても恥ずかしく思えました。児童生徒と接する際につかみは肝心です。中学生や高校生は自分に話しかけづらそうにしていました。しかし、小学生はそんなこと関係なく、自分の素直な気持ちを伝えてくれました。

次に、小学校では、児童の成長がより実感できると感じました。小学校に通う年数が長いので、小学生の成長は中学生と高校生の成長より目に見えらると思います。しかし、その理由だけでなく、できることよりできないことの方が多く小学生はできるようになる姿やいつの間にかできるようになっている姿を目にする機会が多いように感じました。ボランティアで通い始めた最初の頃は給食の時間に児童が騒いで食べていて、注意してもほぼ無意味でした。しかし、通ううちに注意しなくても徐々に給食を静かに食べるということを実感して、児童の成長を見ることができました。

最後に、教えることの難しさを改めて感じました。小学生と遊んだ際、ルールをなかなか守らずに自分の有利にルールを決めてしまい、周りの人に迷惑をかけている児童がいました。このルールを守るということは将来絶対に身につけなければいけないことだと思います。しかし、今回このルールを教えるということがなかなかうまくいきませんでした。

本格的に教育関係のことを学んでから4年が経ち、中学校と高等学校の現場で体験し、自分は十分ではなくとも少しは経験を積んできたつもりでいたので、今回の小学校ボランティアでは、正直あまり学ぶことがないかもしれないと思っていました。しかし、今回の学校ボランティアでも考えたことや困ったことがたくさんあり、まだまだ未熟者だと痛感しました。今までの経験はかけがえのないものです。しかし、これらの経験だけではまだまだ不足していると思います。これからも様々なことに挑戦し、

様々な経験を積んでいくことができれば、教員として成長することができ、いずれ一人前の教員になれると思いました。

4. 学校で生活する人々を支える

生物科学科 4年 西村 義樹

今回の学校ボランティアでは、10月から12月の毎週金曜日(9:30～13:30)に土屋小学校で活動させていただきました。主な活動内容は、図書室での蔵書整理、校務作業の手伝い、授業補助などでした。蔵書整理では、図書室にあるほぼ全ての本のバーコードを読み取り、シリーズや順番に気をつけながら本棚の整頓を行いました。校務作業の手伝いでは、落ち葉を集めて腐葉土を作ったり、花壇の掃除と花の植え替えをしたり、菊祭りの会場づくりを行ったりしました。授業補助では、1年生の生活、4年生の算数、5年生の国語の授業に入らせていただきました。また、午前中の授業終了後は、1年1組の教室で給食を食べてから児童と一緒に清掃活動を行い、昼休みは学年を問わず鬼ごっこやドッジボールなどをして児童と交流しました。

午前中の活動は校務作業の手伝いが多かったので、普段校務員がどのような活動をしているのかということがよくわかりました。校務員は児童が授業を受けている間に主に活動をしているため、仕事の内容は児童には伝わりづらいと思います。もしかすると、教員は児童と一緒に過ごす時間が長いので、校務員についてあまり知らない人もいないのではないかと思います。自分自身、校務員の仕事に関して理解が浅かったのですが、実際に仕事を体験したり、お話をさせていただいたりしたことで、どんな思いで活動しているのか、いかに陰で児童や学校を支えているのかということを感じることができました。

最も印象に残っているのは、土屋小学校の校

務員さんと初めて活動させていただいたことです。この日は校舎周りの清掃が主な活動内容でした。それまで蔵書整理が活動のメインだったので、新しい活動ということもあって張り切って清掃に向かいました。そのとき一緒にボランティアを行っていた学生と黙々と作業をしていると、校務員さんに「そんなに真面目にやなくていいよ。この近くをゆっくり掃除してくれればいいから」と言われました。その時間帯は6年生が授業で写生を行っていて、私たちの近くにも1人の児童がいました。私たちが清掃していた場所は校舎の裏の長い階段のある所で人目につきにくい所でした。校務員さんがそうおっしゃったのも、清掃ではなく児童を見守ることが活動のメインだったからでした。「掃除は適当でいいから、しっかりあの子を見てあげて」と校務員さんから伝えられたときに、校務作業をしつつ普段からこうやって児童のことを見守っていることに気づかされました。自分が児童あるいは生徒だったときに掃除などをしてきた校務員の方が、実は自分たちをしっかりと見守っていてくれたことがわかって感動してしまいました。中休みや昼休みに児童と遊んでいるときに、校務員さんが遠くに立っている姿や校門を通る車の誘導をしている姿を見て陰で支えていることを感じました。教員の目が届かなくても、校務員さんをはじめ、必ず誰かが児童を見守っていたので、しっかりと連携がとれていました。

教育実習や土沢中学校でのボランティアでは教員の立場から見た学校を学ぶことができたのですが、今回の活動で校務員というまた新しい立場から学校を見て学ぶことができました。学校で生活する人々が安全に気持ちよく過ごせるのは、教員をはじめ、校務員の方々の存在があってこそのものだということ強く感じました。この経験から、自分も多くの人に支えられて生きていることを忘れず、感謝の気持ちを持って人と接していこうと改めて決意しました。

最後に、貴重な経験をさせていただいた土屋

小学校の先生方、職員の方々に感謝いたします。

5. 子どもたちの考え方を大事にする

情報科学科 3年 川尻 みほ

私は、2014年9月から12月の期間で、平塚市立土屋小学校の学校ボランティアに参加しました。週に1回、火曜日の9時30分から13時10分の時間帯で参加してきました。活動内容は、午前中の参加だったため、2,3,4時間目の授業サポートとして、主に算数をメインとした授業の補助に入ったり、授業見学をしたりしました。また、1年生の教室で児童たちとともに給食を食べ、そのあと、一緒に清掃活動をしてきました。

ボランティアを通して、子どもたちの多種多様な考え方から授業を展開する方法、習ったことを次に生かす方法を学んだり、考えたりしました。

小学校の授業は、子どもたちが主体となり、子どもたちの多様な意見や考え方をもとに授業が成り立ち、進んでいきます。例えば、1年生で $13-9$ という引き算をブロックで考える授業だとすると、子どもたちはまず、自分ひとりでブロックを使って考えていきます。結果としては、 $13-9=4$ という考え方が分かれば問題ありません。しかし、授業では、3つの考え方が子どもたちからあげられていました。1つ目は、13個のバラバラなブロックから9個とる方法。2つ目は、13個のブロックを10個と3個に分けて考え、10個から9個引き、あまりの1個と3個を足す方法。3つ目は、13個のブロックを10個と3個に分けて、10個から1個取れば9個だから、その1個と3個を足す方法。このように、1つの答えを出すことだけにでも、3つの考え方が子どもたちからあがっていました。

こんな多様な考え方ができるということは、

その学習が理解できているということだと考えています。私が教員になってから、この子どもたちの多種多様な考え方を伸ばし、その考え方を活かした授業を展開していけるようにしたいと思っています。

次に、一度習ったことは、「このときはこう教わったから」ということで、そのまま印象に残っていることが多いことに気がつきました。しかし、その習ったことを次に使っていくためには、少し考え方を変えてみる必要があるときがあります。例えば、5年生で数直線上に与えられた分数や小数を表すという授業のとき、その日の授業での数直線は、0と1の間に目盛りが20本振ってありました。子どもたちは、今まで0と1の間には目盛りが10本だったので、1目盛り0.1として考えて答えている子が多くいました。その子に話を聞くと、「前に習ったやり方でやったよ。どこが間違っているの?」と答えていました。子どもたちは、一度習ったことをそのまま活用したので、合っていると思っています。しかし、今回は既習内容を発展させて、少し視野を広げ、1目盛りが0.1ではないことに気づかなければなりません。

子どもたちに少し視野を広げさせ、今回は前に習ったことをそのまま使ってできるのか、それとも少し変更して使わなければならないのかについて考え、うまく活用させることが大切であると学びました。

学校ボランティアに参加して、はや2年が経ちました。毎回行くたびに、たくさんのことを勉強しています。自分で模擬授業として考えても出てこない考え方を子どもたちが持っていること、授業の工夫が必要なことなど、これらは学校ボランティアに参加しているからこそ気づく点だと感じています。

半日ではありますが、午前中小学校で過ごすことで、授業だけではなく、休み時間や給食時をともにすることで、この時間はこの点に注意して子どもたちを見なければならぬ、天気によってもそれは変わってくるということを学び

ました。

学校ボランティアを通して学んだことは、将来役に立つことが多くあるので、これからもいろいろと学んでいきたいと思っています。

6. 先生と大学生

化学科 3年 横山 貴裕

私は、土屋小学校で3か月間、毎週月曜日の午前中に、学校ボランティアをさせていただきました。主な活動内容は、授業見学や事務的な仕事をするものでした。小学校では、一人の担任教諭があらゆる科目を教えるため、苦手な科目でもわかりやすく工夫して教えなければならぬので、先生のサポートとしてボランティアできるのか不安でした。

初日に職員室に行くと、まず校長先生と話をしました。そこでは、「横山君は、学生さんだからぜひ、休み時間に生徒と遊んであげてほしい。教員ではなかなか話せないようなことも年代の近い学生さんとなら話しやすいかもしれない。」と言われました。私は、「わかりました。よろしくお願いします。」と言いつつ不安に思っていました。この日は、あいにく授業を見ることはできなかったのですが、事務的な仕事をやらせていただきました。内容としては、小学校の敷地内を回ってゴミ拾いをしたり、小学校で育てている植物を大きなプランターに移したりしました。このとき、内心では「本当にボランティアになっているだろうか。本当は迷惑になってしまっているのでは。休み時間に初めて会う子どもたちと一緒に遊べるのだろうか。」という不安がいくつも重なっていました。

休み時間になり、校庭に出てみると、すでに一人の男の子がボールを持って出てきていました。「サッカーが好きな？一緒にやろうよ。」という「いいよ。」と言ってくれ、二人でパスをしていました。数分経つと、次から次へと

子どもたちがグラウンドに出てきて、「お兄さん誰？俺たちも入れて！」といてどンドン加わり、みんなでサッカーをしました。転んで擦りむいたり、本気で競り合ってきたり、みんな全力で向かってくるので、いつの間にか私も全力で走っていました。みんなバタバタになった頃に休み時間が終わりました。ほんの少しの時間でしたが、最初に思っていた不安が嘘だったかのように打ち解けることができたので、子どもたちと私の距離がすごく縮まったなと感じることができました。職員室に戻ると、校長先生から「お疲れ様でした。たくさん走って疲れたと思うけど、生徒たちはみんな元気だったでしょ？きっと新しくお兄さんが来てみんなうれしいよ。ありがとう。忙しい先生方はなかなか子どもたちと遊んであげられないから、こうやって子どもたちと遊んで心のケアをしてくださる方がいてうれしい。」と言われました。このとき、初めて今回の小学校ボランティアで先生方から私たちに求められている役割に気がつききました。

私たち大学生のほうが年齢的にも近いし、ボランティアだからこそ休み時間に全力で遊んであげることができます。もちろん授業のサポートとして分からない子どもたちにアドバイスをしてあげることが大事ですが、それだけがボランティアではなく、「休み時間などでコミュニケーションをとって、子どもたちの心のケアをすること」、これも立派なボランティアだと思います。そして私たちだからこそできる、先生方にとっても助かる大事な役割だと思います。そう思うと、不安な気持ちもなくなり、楽しくボランティアに行けました。サッカーをしたり、ブランコをしたり、一輪車に乗ったり、子どもたちとたくさんコミュニケーションをとるようにしました。みんな一生懸命に遊ぶので授業が始まるころにはバタバタになっているのですが、楽しく遊ぶことができたし、とてもやりがいを感じるすることができました。

私は今後も学校ボランティアを続けていき

いと思っています。そして、これからも先生方のサポートとして子どもたちとたくさんコミュニケーションをとって、私たちだからこそのできる心のケアができたらいいなと今回の小学校ボランティアを通して思いました。

7. 考えさせることの大切さ

化学科 2年 磯部 莉菜

私は10月から12月まで土屋小学校の学校ボランティアとして参加させていただきました。毎週水曜日の12時40分から15時30分の時間帯で活動しました。ボランティアの活動内容としては、給食と一緒に食べたり一緒に遊んだり、清掃のお手伝い、授業の補助、校務の方のお手伝い、下校指導等でした。

今回の主な活動は、1,2年生の授業に参加させてもらったことでした。授業を見学させていただくことで、先生方が子どもたちが理解しやすくなるために工夫していることが分かりました。そして、ただ教えるだけでなく子どもたちの気づきを大切にしていると感じました。その中で印象に残ったことが2つあります。

1つ目は、1年生の道徳の授業です。道徳は自分で考える力を養う授業です。そのため先生は教科書を読ませるだけでなく、実際に主人公の気持ちを考えるために児童自身にその役を演じさせていました。児童は役を演じることでその人の立場になって相手の気持ちを考えることができていました。また、授業以外でも先生は悪いことをした児童をただ注意するだけでなく、友達に嫌なことをされた児童が、どんな気持ちだったかを尋ねて相手に伝えさせていました。そのことから先生は嫌なことをした児童に自分の言った言葉で相手を傷つけてしまうことがあるということを気づかせようとしていました。このような場面でも、ただ注意するのではなく児童に考えさせるということが大切だということ

とを学びました。

2つ目は2年生の算数です。その日は九九の授業でした。7の段や、8の段は覚えづらく多くの児童が苦勞するところのひとつです。そのため、先生は音楽に合わせて一緒に歌うことで視覚だけでなく聴覚としても取り入れ、楽しく覚えられるように工夫していました。また図形の授業では、先生が三角形、四角形などいろいろな形の図形をプリントし配布していました。児童はそこから三角形、四角形を選別する問題を問いていました。それにより公式を覚えて問題を解くという授業ではなく、三角形や四角形がどういうものかということ児童に考えさせる授業を行っていました。私が小学生のときは、先生主体の授業でしたが、ボランティアに参加させていただき、児童が自ら作業を行い、児童主体となって授業を行うことで理解が深まるということ改めて感じました。

3ヶ月間という短い期間でしたが、学校ボランティアで貴重な経験をすることができました。私の小学校時代は、先生主体の授業が多かったのですが、現在は児童主体の授業に変わってきていることがわかりました。そのために先生は多くの工夫をし、授業を行っていました。楽しく学校生活を送っていたのは先生方のこのような努力のお陰だということ改めて感じました。教師になったらこのボランティアで学んだことを生かしていきたいと思います。

8. 今まで感じたことのない学校

化学科 2年 持田 茂樹

私は、毎週金曜日の午後に土屋小学校でボランティアを行いました。校務の仕事を行うことが多かったのですが、数回授業の補助という形で、4年生と5年生の図工と総合の授業に参加させていただきました。さらに給食の時間と昼休みは、子どもたちとふれあうことができました。

た。

今回の学校ボランティアでは、授業の補助や子どもたちとの関わりを通して、教師として子どもたちとの接し方や関係性というものを考えるきっかけになったと感じました。自分が子どもとして過ごしていた頃は知ることもなかった校務の内容も様々あり、常に仕事があると感じました。

まず、授業の補助に入って感じたのは、子どもたちが私のことを先生としてみてくるので、言葉遣いに気をつけて、もっと自覚を持たないといけないということでした。しかし、先生方と違い、年が近いせいか、子どもたちへの言葉遣いが友達感覚の会話になってしまいました。そのため教師と生徒という関係性ではないと感じ、気をつける必要があると気がつきました。そしてその授業の中で、ふざけている子どもに対してどのように注意をしたらよいかわからず、そのままにしていたら、クラス中に広まってしまいました。その後、先生が注意をしたら収まったものの、自分もこのようにしなければならぬと自覚しました。その授業の担当の先生からは、「大変で難しい、ただ面白いこともたくさんある」と言われました。私もそのように感じました。

ボランティアのときは、給食を子どもたちと共に食べるようになっていきます。給食の配膳のとき、食事のマナー、ルールを守れていない子どもに「駄目だよ」と注意をしたとき、素直に聞いてくれたのでよかったです。なんでダメなのか、聞いてくる子どもに対して、ダメな理由もしっかり教えてあげて、考えさせるようなヒントを上げることも大切だと先生方を見て感じました。答えを教えるのは簡単なことですが、それでは子どもの成長を妨げてしまうのだと思いました。そして教師とは、子どもたちに勉強を教えるだけでなく、社会のルールなどを教えることも役割の一つだと感じました。

校務にもさまざまなことがありました。落ち葉の回収、図書室の蔵書の整理、切り株切りな

どを行いました。今までは子どもとして学校で過ごしていたので、学校の細かい仕事は全く知ることはありませんでした。そのため、先生はこんなこともやるのか、と驚くようなことも多々ありました。事務的な仕事が主な内容かと思っていたら、肉体労働もあり、このようなことを先生方はやって裏からも子どもたちをサポートしていたのだと気づきました。このように先生方の細かな気遣いのおかげで子どもたちは、安全で楽しい学校生活を毎日送ることができているのだと感じました。

今回の学校ボランティアを通して学んだことを生かし、自分のものにできるようにしたいと思います。そして、これからの授業で少しでもスキルアップしていけるように努めていきます。

土沢中学校

9. 生徒が描く教師像

情報科学科 4年 水戸 紘子

1年生の授業支援と放課後学習会に参加させていただいた。数学が好きという生徒も苦手という生徒も、多くの生徒が数学に関心を持って取り組んでいたため、活発な活動の中から生徒の状況を知ることができた。生徒と触れ合った中で、今回は教師像について考えた。まず、大人が想像する生徒が望む教師とは、だいたい「口うるさくなく、褒めて生徒を伸ばす専門教科に長けた教師」といったところではないだろうか。今回は印象深く残った二つの出来事を中心にして、生徒が描く教師像について考える。

授業の号令の際、毎度ちょっとした問題を起こす生徒、A君がいた。A君に関する指導のため授業がなかなか始まらないことも何度かあった。私はA君が何を求めているのだろうと思いつつ、授業開始前にA君の机の前に立ってみた。するとその時間は特に号令で目立った行為をするということもなく挨拶を終えた。そのとき問題を起こしたのは別の生徒だった。先生はそれについて指導した。さらに加えて日頃の態度の話を加えた。よく問題を起こすA君は当然のように注意された。A君は名指しで何度か注意されていた。始めの二回は小さな声で「俺なんもしてねー」といった風に文句を言っているようだった。しかし、何度かのちに「なんで俺に言うんだよ！」と大きな声で怒った。先生の言葉を聞き入れたようには見えなかったが、授業は始まった。もちろんA君は納得がいかないままだ。授業が始まってもプリントが配られてもペンを全く握ろうとしなかった。

授業を全く受けようとしないうA君にまずプリントに名前を書くことを指示した。しばらく

経ってもう一度A君のところへ行くとグラフの原点を塗りつぶしていたので「そこ通るの、あってるよ」と言った。A君は「ここは通るに決まってんじゃない」と答えてまだつまらなそうに原点を塗りつぶしていた。そこで「そこしか通らないのかー？」ときくと「そんなわけないけど、やり方忘れた」と言ってようやく問題文を読み始めた。A君のようにクラスの中で目立って問題を起こす生徒は他の人に「問題児」というレッテルを貼られているように思う。A君が良い行動をしようと悪い行動をしようと「問題児」という名の下で判断が下されていく。一連の流れを見てA君の求める教師像は「自分を見つめてくれる人」なのだと感じた。

もう一つの出来事は放課後学習会活動中の生徒、Bさんの質問からのものである。私は今まで、生徒の質問内容以外は極力答えないことによって、わからないことを言葉に表現することの大切さを伝えてきた。そのためか生徒はよく考えながら言葉にして質問をしてきた。二つの直線の交点を求める問題について質問された時のことだった。二つの直線の式を求めて連立方程式をすると答えが出るのだが、授業を受けてからしばらく経っていたためか多くの生徒が苦戦していた。しかしほとんどの生徒は方程式で計算ミスをしているだけで、連立方程式の理解が間違っているわけではなかった。いつものように聞かれたことのみで答え、生徒に考えさせるようにしていたところ、問題の解決寸前になってBさんに言われた。「でも先生、前にこんな感じの問題を解いたときはこんなに難しくなかった気がする。どうしてなんですか？」その生徒の顔は不安に満ちた顔だった。

不安に満ちた顔のBさんの問いに一言答えた。「練習してないから忘れちゃったんだよ」とめんどくさそうにワークを開き、間違えたものと似たような問題を取り組み始めた。Bさんが私に求めたのはきっと連立方程式の簡単な解き方、つまり「専門教科に長けた教師」なのかもしれない。簡単な解き方は教えなかった

がBさんと一緒に聞いていた生徒たちは皆ワークを広げ一生懸命に問題に取り組んでいた。Bさんが本当に求めているのは専門性よりも「信頼できる教師」ではないだろうか。

褒め伸ばしが良いことは確かかもしれない。専門教科に長けることに越したことはない。しかし一番大事なものがある。生徒が描く教師像とは「真剣に向き合ってくれる信頼できる教師」であると感じた。

10. 今の中学生を見て学ぶこと

情報科学科 4年 平野 晃

私は10月から12月の間、毎週水曜日の午前中に土沢中学校の学校ボランティアに参加しました。主に数学、または理科の授業の見学、机間指導などをさせてもらいました。

その中で生徒でも教師でもないボランティアという立場から見たことによって感じたことがあります。私が生徒の立場でいたときと教育実習生の立場でいたときとは学校に対する捉え方が変わりました。そして今回のボランティアでさらに新しい学校の一面に気づくことができました。

私が多く参加させてもらったクラスは仲がよく、中学生という微妙な年頃ではありますが、発問に対しての反応もよくて先生の発問中に生徒が先に答えを言ってしまったり、どちらが先に解けているかを競っていたりと勉強に意欲のあるクラスだと感じていました。しかし意欲がありすぎるのか、できない生徒に対しての風当たりが強いように感じました。意欲がある印象なのに問題を答えるスピードが違うだけで「できない」というクラス全体としての空気が生徒のやる気を無くしていく。そのような様を授業中後ろから見ていました。

学校全体としてではなく、あくまでもそのクラス特有の空気ではありますが、このようにク

ラス内で小さな言葉のやりとりが生徒の意欲を減らしていくことはどのクラスにでもありえることだと思います。そのようなことが起きてしまう要因を考察していきます。

一つ目の要因は中学生であるということです。思春期は心と体のバランスがとりにくい年頃であり、今の中学生は自己愛が強く、他人を傷つけることに抵抗が少なくなってきました。勉強ができる、できないという物差しで他人を批判し見下す行為は、今の監視しあう社会のなかでの一種の自己愛の表現であり、怒りやもやもやはけ口になっているのではないかと思います。

もう一つの要因に生徒の観客化があると思います。つまり周りで起きていることに対して無関係を貫き、関心のままに批評をする生徒が多くなってきているのだと思います。学校には一般的にいじめ等が存在すると生徒たちも認識しています。この環境は生徒たちに目立つのはいいことではないという考えを持たせているのではないかと感じました。もちろん自分から積極的に動いていく生徒がいなければいけないのですが、いたとしても自ら動いていく生徒をほかの生徒は憧れや嫉妬の目で見て、色々な言葉で評価をしています。それはインターネットの誹謗中傷と同じようなもので今の社会の環境が生徒に観客の野次に似た評価をさせているのではないかと思います。

もし、これらの要因を教師として解消しようとするなら、もっと生徒に歩み寄り、生徒の今を知り、認める必要があると思います。私が中学生のときの些細な問題と今の中学生の些細な問題を見ると、変わったなと思うこともありますが、なぜ起きたかを考えると心情として理解はできます。それは心の問題が多くを占めているからであり、年代問わずそのような問題は起きかねないものであると思うからです。もし年代で違いがあるとしたらその場合、社会や教師、クラスメイト等の環境の違いから問題の表面化する形が異なるのであり、根本的な心の動

きは変わらないと思います。

自分が教壇に立つときは、生徒と多くの時間を過ごすなか、社会人として必要なものを少しでも伝えられたらと思います。それは発言や行動の責任、影響を理解することであり、自分と違う部分を認めることができれば今回の問題は解消できるのではないかと思います。そして伝える手段は、言動もちろんですが普段の教師生活の中や授業中の態度、そして生徒との何気ない話から感じてもらえるようにしていきたいなと思いました。

11. 信頼される教師とは

情報科学科 4年 上原 竹雄

今回私は10月～12月にわたり土沢中学校へ学校ボランティアに行き、月曜日と水曜日の1時間目～4時間目(9:05～13:30)に1年、2年、3年生の数学の授業に参加し、サポートをしました。

私は以前にも土沢中の学校ボランティアに行っており、覚えてくれていた生徒もいました。またアルバイトで個別塾の講師や教育実習の経験もあるので内心は「今まで積み重ねてきた経験があるし、以前にもボランティアに参加していたし、なんとかなる。」と正直なところとても軽い気持ちでいました。

実際に土沢中学校へ学校ボランティアに行ってみると以前とはやや異なることがあると感じました。以前は授業中でも分からないことがあったら質問をしてくる生徒が多かったのですが、今回は積極的に質問をしてくる生徒があまりいなかった印象を受けました。そこで困っている生徒に机間指導で説明しようとしたところ「大丈夫です。」と断られてしまいました。もちろん積極的に質問してくる生徒もいましたが、断られたことに私はとてもショックを受けました。

また、他の授業では、先生に対してとても反抗的な生徒がいました。先生の話に聞く耳も持たず友達と話していて、先生に何度も注意されていても言うことを聞かないくらいです。ある授業で分度器を使うことになり先生が分度器を配っている際、その生徒は、「〇〇先生が貸してくれたらちゃんとやるのに。」と言いました。こんなに先生に反抗しているのにその先生なら真面目に授業を受けると豪語するのだから相当な信頼があるのだなと思いました。そこで、私は2人の先生でどのような違いがあるのかを考えてみました。一番に違うと感じたのは生徒とのコミュニケーションです。信頼されている先生は授業以外でも生徒とよく会話をしている、生徒の話当真に聞いている。それを見て生徒と真剣に向き合っている先生ほど信頼を得ていると感じました。

実際に信頼されている先生の話を生徒から聞いてみたところ、「教え方が丁寧でとても分かりやすい。」と言っていました。また「授業で分からなかったことも質問を通してより理解することができてよかった。」とも言っていました。

私は土沢中学校へボランティアに行き、実際の授業や学校生活を見学し、教えることだけでなく生徒との関係の築き方を学ぶことができました。今までは教えることばかりに気を取られすぎてしまい、生徒のことを考える余裕がありませんでした。塾の講師をやっていることが中心になってしまっていて生徒の気持ちを考えずにうまくいかなかったこともあったように思います。教えることももちろん大切なことですが、生徒の信頼を得ることで勉強以外のことを学ぶことが出来ると思います。この学校ボランティアでの経験を、今後自分が教師の立場に立った時に活かし、信頼される教師になりたいと思います。

1 2. 生徒側・教師側を経験して

数理・物理学科 3年 松本 一宏

私は10月から12月の間、毎週水曜日の1限目、2限目に土沢中学校のボランティアに参加しました。活動内容としては授業の補助やプリントの作成などをしました。今回ボランティアに週1回という少ない回数でしか参加できませんでしたが、多くの発見をしてたくさんのことを学びました。この学校ボランティア活動で学んだことは3つあります。

1つ目は、生徒たちの考え方が素直だということです。自分の思ったことを授業で発表したり、「先生！先生！なんでそうなるの？」と聞いていたりしていました。わかったときはわかったと言い、わからなければわからないと言います。1年生の方程式の授業に参加させてもらったとき、ついてきていない生徒に指導しました。何がわからないのか聞いてみるとすごく単純なことでした。新しいことを学ぶ生徒からすると、すごく難しいんだと感じました。説明し終わると笑顔で「わかった！ありがとう！」と言ってもらえて、すごくうれしくなりました。

2つ目は、何でも先生や自分たちが教えてはいけないということです。わからないとすぐに教えたくなるのですが、見守ることも大切だと思いました。そうすることで生徒も成長することがわかりました。また、生徒が友達同士で教え合って問題を解いていたのはとても印象的でした。初めてのときは、自分自身も緊張していて周りを見る余裕がありませんでした。しかし、回数を重ねていくことで環境にも慣れ、生徒同士で教えあっていることに気づきました。お互いの考えを述べ合って答えに辿り着くことは、将来絶対に必要になる力だと思います。

3つ目は、教師の裏の仕事です。私が生徒だったときはただ教科書が与えられ、授業時にプリントが配布される受け身側でした。しかし、ボ

ランティアで数学のプリントを作成してほしいと言われ初めて授業時にやる問題プリントを作成しました。数式をパソコンで入力することは慣れていないので、1つの問題を完成させるのにとっても苦勞しました。また、同じパターンの問題ばかりだと簡単過ぎてしまうので、バリエーションなども考えて難易度を調整しなければいけない点に苦勞しました。プリントが1枚完成したとき、これが今の生徒に解いてもらえると思うとうれしいのですが、責任も重大だと思いました。教師が1枚の問題プリントを作るのにどれだけ大変か学ぶことができました。

今回学校ボランティア活動を通じて貴重な体験をさせてもらえました。教師として教壇に立つわけではなく、後ろで授業を見て生徒の補助をしていただけかもしれませんが、多くのことに気づかされ、学ぶことができました。もしまた参加できる機会があれば是非参加して、自分の将来のために学校ボランティアを経験して活かしていきたいと思います。

1 3. 2年間の経験で得たこと、考えたこと

数理・物理学科 3年 高橋 雄亮

今回、10月から12月の約3か月間にかけて、平塚市立土沢中学校で、学校ボランティアに参加させていただきました。活動日は毎週水曜日の1時間目から4時間目までで、数学3時間、理科1時間でした。

数学の授業では授業中に行われる練習問題でわからない生徒に教える授業補助や、生徒が聞き逃したところの内容の解説等を行いました。また、今期は数学のみ毎週、1年～3年、すべての学年を見ることができ、大変勉強になりました。

理科では授業のサポート（主に生徒のプリント演習でのわからないところのアドバイス等）

や実験室の清掃や授業見学等を行いました。

今回までで、約2年間参加させていただきました。土沢中の生徒たちにもだいぶ名前と顔を覚えられ、今年になってからはいろいろな生徒から話しかけてくれて、楽しく活動ができました。ですが、話をしてくれた中で、自分の中学校時代とは違った悩みも発見でき、また、自分の知らないことなど、いろいろなことを知った活動となりました。そんな中で、今回は自分が今まで行ってきた体験から得たもの、それと考えたことをテーマとして、書いていきたいと思えます。

まず、授業を見学できたということで、授業をするうえでのポイントやコツを学ぶことができました。普段、自分たち学生は、模擬授業のみでしか授業体験ができませんし、生の授業を体験することができません。何より、生徒はどこが理解しにくいのかもわかりません。そういった意味では、この活動は、普段できないことができたという観点から、とても良い体験となり、勉強となりました。特に数学では、そう感じました。例をあげると、グラフの書き方や平面図形の作図の仕方です。グラフや作図の書き方などは、よく話を聞いていないと勘違いしてしまう生徒が多く見受けられました。そのときは、自分たち学生がいたため指導できたのですが、普通の学校では、教える人は教師のみです。その際、より1人でも多くの生徒にわかってもらうにはどうすればいいのか、という課題が見えてきました。

また、最近感じているのが、生徒とのコミュニケーションの大切さです。今は中学生と大学生、教師と生徒の関係でもないし、年も近いことから、いろいろな話もしてくれますし、兄弟みたいな関係で相談もしやすいのですが、教師になったら、どうなんだろう？と考えました。自分が中学生のときは教師との壁を感じて、あまり相談をしたという記憶がありません。コミュニケーションの取り方にも問題があるかもしれないですが、生徒になんでも相談してきても

らえるためには、どうすればいいのか、と考えました。そのためにも、生徒一人ひとりちゃんとしていくこと、コミュニケーションの取り方を今からもっと養っていくことの必要性を感じました。そうした中で、生徒との信頼関係を築きあげたいと思います。

こうして振り返ってみると、まだまだ考えていくことや自分磨きをしなければいけないことが多いと改めてわかりました。これからいろいろな活動を通して、もっといろいろな体験をして、将来のために自分を磨いていきたいと思えます。

土沢中学校の先生方、この2年間、本当にありがとうございました。また、機会がありましたら、参加させていただきたいと思えます。

14. 教えることの美しさ

数理・物理学科 3年 山本 直樹

私は中学校のボランティアとして、10月から12月に土沢中学校に7回、ボランティア活動に参加しました。7回すべての活動で1年生を担当させてもらいました。そのうちの4回は実際に1年生の数学の授業の補助をさせてもらいました。演習問題を解いている生徒への補助、そして、授業中の机間指導をしました。2回は1年生の理科の授業の補助、授業中の机間指導、演習問題を解いている生徒への補助をしました。

1回は1年生の数学の演習問題のプリントの作成でした。私は、数学専攻で数学の教員になりたいと思っていますが、中学校では授業変更が多く、いろんな活動をさせていただきました。

大学の授業では模擬授業など、教える練習はしてきたのですが、実際に生徒に対して教えることや、学校ボランティアに行くことが初めてでしたので、学んだことが多く、今までは「教

えられる立場」として見てきたものが、今回の体験で「教える立場」としての見方ができました。今回初めて経験したことや、理解したことを書かせていただきます。

最初に、実際に「教える立場」という視点から授業を見ることができ、先生がどう教えているのか、生徒にどうやって伝えているのか、板書の工夫はどうか、など自分が模擬授業をやってきた中での課題点の改善策などを見ることができました。例えば、私が見た先生は、生徒にいかに興味を出させるかに重点を置いた授業づくりをしていました。笑いをとるような授業づくり、そして重要なポイントに関しては、ゆっくりした口調、強調した言い方をしている、これが授業づくりだと感じました。そして、今の中学生は塾や個別指導などに行っている生徒が多く、授業をどう進めていくかは、先生次第だととても強く感じました。模擬授業をして私の一番の改善すべき点であると感じていた板書の仕方に関しては、授業を見学していて本当に美しく、色使い、字の綺麗さ、大きさ、全てにおいて学ぶことがたくさんありました。「教師は板書で勝負する」という言葉を以前聞いていた私は、本当にこのことだと、痛感しました。

次に、実際に机間指導をして、生徒に伝える、教えるということがたくさんありました。私自身初めての経験だったので最初は緊張していました。しかし演習問題を解いている中、手が止まっていた生徒にすぐに教えることができました。教えていく中で、すぐに理解してくれる生徒がいれば、理解してくれなくて、悩む生徒もいました。その中で早く工夫をして生徒にわかるように教え、伝える術を学ぶことができました。そして生徒に教え、わかって答えが出た時の感じが、これが教師だと再確認できたと思います。そして、何度も活動させていく中で、わからない時に実際に呼んでくれる生徒もいて、教える嬉しさ、楽しさを学べました。

「教える」という立場の視点が変わって、実際の現場で、教えている先生の授業を見学し、

演習問題を解いている生徒への指導をしていくなかで多くのことを学び、たくさんのかを感じました。私が目指したい先生への良い材料もたくさん得ることができました。なにが良い先生なのかを考えたとき、マニュアルに沿って授業を進めていくだけではいけないと考えます。マニュアルはもちろん大事ですが、マニュアルを基本にして、いかに自分らしさを出す授業を作っていくか、そして生徒にどう興味を持たせるかが大事だと思いました。

最後に7回ボランティア活動をさせてもらい、教職への気持ちが一段と強くなりました。そして、たくさんいろいろな話を先生とさせてもらい、「山本君は教師に向いているよ」と言われたことが、一番印象深いです。話していく中で社交性があると言われ、この一言が本当に嬉しかったことです。正直、土沢中学校の方々には役に立ったかわかりませんが、私自身は多くのことを学び、とても良い経験ができたかと思えます。今回の経験から、教師の準備のための1つのステップに繋げていきたいと思えます。貴重な経験をさせてもらい、ありがとうございました。

15. ボランティアで見えたもの

情報科学科 2年 北 丈一郎

今回のボランティアを通して、様々なことを学びました。その中で、特に印象に残ったことを述べます。

はじめボランティアをするという立場から、生徒にどのように接したらよいかを考えていましたが、生徒の暖かい出迎えにそのようなことはあまり考えず、教える側として自信を持ち接することができました。手が止まっている生徒、寝ている生徒を中心に見回っていました。あるとき先生が、「お前たちはいつでも教えてもらえる環境があると思っはいけない。自分で考

えろ。」と言いました。もちろん自ら進んで考えたがわからないという生徒もいましたが、この言葉からこのボランティアが、生徒にとってデメリットもあることを知りました。そこで、生徒一人ひとりにやる気を持たせるような言葉をかけることにしました。ある生徒は最初、「全然わからない。」と問題に全く手をつけずにいましたが、「答えは違ってもいいから式を書いてごらん。」と何度か言ったところ、徐々に手を動かすようになりました。これは、生徒によい刺激を与えられたため、よい経験になりました。

生徒の授業態度を見ていて感じたことは、落ち着きの無さ、集中力の無さです。もちろん、先生の話をしっかり聞き、出題された問題に自ら進んで取り組む生徒もいますが、大声で友人と話す生徒や、手をつけずに何もしない生徒もいました。そういう生徒は先生に何度も注意されて、やっと集中して取り組むという状態でした。これを何度も繰り返してきたことを知り、クラス全体への影響を考えさせられました。これは、勉強の遅れや、学校生活への支障を引きおこしかねないと思いました。先生は生徒がどうしたら集中できるか考え、様々な試行錯誤を繰り返してきたのだと思います。しかし、実際、授業を進めなければならないため生徒一人ひとりに十分に手が回らず、ベテランの先生でもうまくいかないことがあるのだと感じました。

教師は、いじめや不登校、このクラスの場合は受験など、様々なことを考えています。その中で、先ほど述べた生徒の状況もどうかしなければならぬとなると、とても大変な職業です。しかし、教師はこれらのことに向き合い、心が折れても対処していかなければなりません。

これらのことにどう対処したらよいかを考えさせられ、教師になって心が折れることがあってもしっかり生徒と向き合っていけるかと覚悟させられました。この学校ボランティアに参加しなければ気づかなかったことです。これから

は教師になる覚悟を持ち、準備を進めていきます。

16. 臨機応変な授業の展開

情報科学科 2年 高田 篤司

私は初めての学校ボランティアとして、土沢中学校で活動しました。隔週の金曜日に、1年生と3年生の数学の授業支援、そして3年生の数学の放課後学習会のスタッフとして参加しました。1年生では「方程式の利用」、3年生では「相似の証明」をしました。放課後学習会では因数分解、相似、図形といった総合問題をしました。

初めての参加なので主に先生がどのように授業を展開しているのか、どのように生徒とのコミュニケーションをとっているのかに注目することにしました。また、生徒ではない立場で授業を受けることで見えてくるものがあるはずなので、それがなにか、自分でそれをどのように活かせるのかを探すという点にも注目しました。

1年生の授業構成はプリントを用いて問題を解くものでした。授業時間のほとんどが問題を解くことに当てられていたので、生徒の近くについて問題の解説をしたり、ヒントを与えたりしていました。そこで気づいたのが生徒によって進み具合がぜんぜん違うことです。解るところは先に解いている子、順番に解いている子、まったく進んでいない子がいました。進んでいる生徒は、途中までは分かっていることが多かったです。逆に進んでいない生徒は式が分からない子や、そもそも問題自体を理解していない子がいました。しかもそういった生徒は周りの人とよくしゃべっていました。先生がやめるように言うと一旦静かになりますが、少し経つとまたおしゃべりを再開していました。

逆に3年生は受験が近いということもあり、先生の話を目に聴いている生徒が多くみら

れました。土沢中学校には2人の数学の先生がいます。私はその内の1人の先生の授業を手伝い、その先生が学年によって指導法を変えていることに気づきました。先ほど述べたように1年生はプリント中心の授業でしたが、それとは対照的に3年生は生徒に質問しながら分からないところを確実に解消していく授業を展開していました。

1年生の授業では先生が中心となって授業が進んでいると感じ、3年生では生徒と一緒に授業を進めている印象を受けました。3年生も1年生と同様に、プリント中心の授業もありましたが、1年生ほどではないにしても、集中が切れるとおしゃべりをする生徒が若干名みられました。説明の時間が終わり、問題を解くという自分の時間を与えられると集中力が切れてしまうという子は、学年に関係なくいるものであると実感しました。これは放課後学習会も同様でした。

1年生と3年生の授業で共通して感じたことは、基本的な計算の仕方を確実に教えていたことです。方程式の問題や相似の証明もそのつど生徒自身に確かめさせることで、先生が生徒の理解度を確かめていました。もし分からない生徒がいたらコンパクトに説明するという工夫もみることができました。先生がどこに重点を置いて、時間をかけているのかがすぐに分かりました。また、色分けされた分かりやすい板書であり、教員を志す身として中学時代とは異なる視点で見ると改めて参考になりました。

学校ボランティアの活動を通して、さまざまなことを学びました。授業展開や板書の仕方、生徒とのコミュニケーションなど、将来先生になったときのヒントを見つけることができました。一方的な授業ではなく、生徒とコミュニケーションをとりながら授業をすることで、生徒との関係が近くなるだけでなく生徒がどこでつまづくかがすぐ分かり、一石二鳥であると感じました。また、先生方も「常に自分の授業を見直して次につなげていかないといけない」と

おっしゃっていました。このことから、先生になっても常に学ぶ姿勢を忘れてはいけないと感じました。このボランティアを通して理想の教師像に近づくヒントを得ることができました。

17. 初めて知った先生の姿

化学科 2年 栗山 夏美

私は10月から12月の3ヶ月間、金曜日の午後、土沢中学校で数学の放課後補習と、数学・理科の授業支援をさせていただきました。数学は主に解けていない生徒の手助け、問題プリントの丸付けなどを行いました。理科は授業の補助もありましたが、主に実験室の整備や、実験の準備などを行いました。

今回のボランティアで私は、大きく分けて二つことを学びました。一つ目は、生徒に対してどういった方法で教えていくのかということ。二つ目は、自分が生徒の時には見ることのない先生の授業外での仕事は一体どういうものかということ。以上、二点について詳しく述べたいと思います。

ボランティアに参加させていただき、実際に生徒と接していると、たくさんを知ることができました。一回目のボランティアは放課後支援でした。数学の放課後支援では、生徒7人を担当させていただきました。そこでは、プリントの問題に対してヒントを出したり、丸付けをして間違っているところを一緒に解き直したりしました。同じ問題で間違っているところも、つまづいたところが違うため、生徒一人ひとりに対して違う説明が必要でした。また、生徒との接し方を間違えればコミュニケーションが取れず、分からないまま次の問題に進んでしまうこともありました。しかし、時間が経つにつれ、生徒も心を開いてくれ、自ら聞きに来てくれました。それにより、どうやって生徒に教えればわかりやすいのか学ぶことができました。しか

し、自分からは積極的に話しかけることができませんでした。放課後支援が終わった後、先生から「生徒にいかにも早く心を開いてもらうかが鍵だからね」と教えていただき、自分の未熟さを痛感しました。最後のボランティアでは、理科の授業で問題のヒントを出したときに、生徒と同じ目線で、生徒が興味を持ってもらえるように工夫しながら教えたところ、「すごくわかりやすかった」と言ってもらえました。この生徒の言葉で3ヶ月の成長が見えた気がしました。

理科の支援では、授業の支援より、実験室の整備や実験の準備をやらせていただくことが多かったです。実験器具はどこに置いたら使いやすいのか考慮し位置を変えたり、使えなくなった器具の分別・廃棄を行ったりしました。実験の準備は、実際に一度自分で実験を行い、欠陥がないかを調べ、そこから試料を人数分作りしました。生徒の時、このような作業を先生が行っているとは知らず、貴重な体験をさせていただきました。先生からも、「実験は片づけより準備の方が大変だし、大切なことだよ。」と教えていただきました。前もって、実験をしておくことは、機械の不具合や器具の破損がないかを知る手段であると知りました。失敗する確率が減り、生徒が安全に実験を行うことができるのは先生のそういった配慮のおかげなのだと思います。

最後に、ボランティアを通して、大学では学ぶことのできない多くのことを学ぶことが出来ました。また、改めて自分は教師になりたいのだと思ったきっかけにもなりました。このような機会を作ってくださった大学の先生と土沢中学校の先生方に感謝しています。また、機会があったらボランティアに参加したいと思いました。

18. 責任と積極性

総合理学プログラム 2年 指旗 和也

10月10日から12月19日までの間、平塚市立土沢中学校でボランティア活動をさせていただきました。主な活動として、理科室の整備、授業支援、小テスト採点、実験準備などを経験させていただきました。理科を担当していた先生にはとても親切にいただき、授業終了後には、生徒への授業展開のコツや楽しく興味を持てる実験の仕方など、たくさんのことを教えていただきました。

今回のボランティアでは多くのことを学ばせていただきました。その中でも私がとても大切だと感じたのは「責任感」でした。実験の準備や片づけ、小テスト採点などを体験させていただくことで、その仕事に対する「責任」を感じました。

例えば、小テストの採点の際に誤って丸をつけてしまったときは、解答してくれた生徒や任せてくれた先生に申し訳なく思いました。もし自分が任せられた仕事で何かすることを忘れていたとしたら、先生に迷惑をかけてしまいます。そのため、実験の準備を任せられたとき、自分のやり方であっているのか、何か足りないものはないかと不安になりました。この影響を受けて知らないことはなんでも聞くように心がけることが大切だと思いました。

理科の授業の多くは教科書に沿った内容で、ボランティアとしてすることがありませんでした。ですから理科室の整備や準備をしていましたが、二回ほどプリント演習の時間に授業に参加させていただきました。自分の中ではこれが一番難しく感じました。

一回目のプリント演習では、机間指導をしながら間違っているところを解説しようとしたのですが、生徒は私語を始めてしまいました。軽く注意をしても聞き流されてしまい、なかなか問題を解いてくれませんでした。電気の分野で

は電流の向きと磁力線の向きの関係が理解できない生徒がいました。最初に右ねじの法則を使って教えていました。しかし、イメージがしづらかったのか理解してもらえませんでした。次に図や矢印を書き込んで説明しましたが、また理解してもらえませんでした。

一回目の接し方では話を聞いてもらえないと思ったため、二回目のプリント演習では接し方を変えて教えようと思いました。一回目のプリント演習の際と同じクラスでしたが、二回目はほとんど生徒とのやりとりがなくなり、授業終了後に生徒から「性格が全然違った」と言われてしまいました。ボランティアという立場上授業の進行を妨げてはならないと思ったため、一回目のような「私語をさせてしまう」よりは二回目の接し方がいいのかな、と思いました。しかし、二回目の接し方が先生として正しいとは思いませんでした。

どのように指導していけばいいのか、というのはとても難しい問題です。話を聞いてもらえなければ熱心に説明をしても意味がないと今回の活動で感じたため、生徒の興味をひく技術はとても大切だと感じました。

生徒と実際に接してみると、いろいろな問題が見つかりました。今回のボランティアを通して先生方から学んだことを活かして、積極的に問題に取り組み、解決していこうと思います。

19. 先生の視点・生徒の視点

総合理学プログラム 2年 高橋 尚大

私は土沢中学校に10月7日から12月19日までの計15回(火曜日の13:40～14:30が7回、金曜日の午後の時間帯が7回、放課後学習会が1回)学校ボランティアとして参加させていただきました。活動内容としては、火曜日は1年生の数学の授業支援で、金曜日は1年生の数学の授業支援や、数学の問題プリントの作成およ

び解答の作成、学活の時間での授業支援や理科室の整備など様々なことを経験させていただきました。

今回の学校ボランティアとしての活動は、私にとって不思議でかつ貴重な体験でした。その理由は、中学生の学習の支援を行うという点やプリントの作成など、普段、先生方が行っていることを体験させていただいたという先生側の視点と、中学校の授業を実際に見学させていただけた、といったような生徒側の視点を同時に体験することができたからです。

当たり前ですが、今までの学校生活は生徒側の視点でしか見ることはできませんでした。例えば、数学の問題プリント1つを考えてみても、生徒にとっては数あるプリントの中の1枚であり、与えられた問題をただただ解くだけのものでした。しかし、その生徒にとって、たかが1枚のプリントだとしても、生徒の理解度を判断し、問題を考え、間違いがないかを確認し、図形や表などを作り、解答を作る、といったような非常に大変な作業であり、先生の努力の結晶といっても過言ではないようなものだと感じました。数学の問題プリント以外にも、先生方が行ってきた数々の陰の努力を見ることによって、先生側の視点について、多くのことを学ぶことができました。

生徒側の視点として学んだことは、授業内だけではなく授業外でもありました。授業内では、生徒が興味を持つような授業の展開の仕方やわかりやすい教え方、板書の工夫の仕方、わからない生徒に対するケアの仕方などを学ぶことができ、授業外でも、現在の中学生の様子や現状、生徒とのコミュニケーションの取り方など授業内・外ともに数えればきりが無いほどのことを学ぶことができました。

その中でも、一番印象に残っていることは、生徒への指導の仕方です。今回、授業支援を行ったクラスは、とても元気がよく、授業中、会話をしていたり、授業に集中できていない生徒がいたりしました。初めのころはそのような

生徒を前にして、どうすればよいのだろうと思ひ、困ってしまうことが多々ありました。しかし、先生はそのような生徒に対して的確な指導をし、授業に集中するように促していました。人を指導することは非常に難しいことです。しかし、教師という職業柄、指導することは避けては通れない道です。先生の実際の対応を見ることができたことは、今後、私が教師になった時に、大きな糧となると感じました。

私にとって、この3ヶ月間の活動は、学んだことが非常に多く、教師になりたいという私の夢を、より一層強くさせてくれたとても素晴らしいものでした。そして、普段の生活では絶対に体験することができない先生の視点を経験できたことは、自分の夢への大きな一歩になると思います。

最後になりますが、このような機会を与えてくださった土沢中学校の先生方、また、関係者の方々へ心より感謝申し上げます。短い間でしたが本当にありがとうございました。

20. 教わる立場から、教える立場 ～生徒から教師へ～

総合理学プログラム 2年 橋田 敬一朗

私は2014年後期、10月から12月までの間に数学の授業支援を1回、放課後の数学学習会に1回、午後の1日ボランティアを数回、土沢中学校でさせていただきました。数学の授業支援では、数学の授業で生徒がわからない事があれば教えてあげ、他にも生徒でも先生でもない立場から実際の中学校の授業を見ることができました。放課後学習会では、放課後に希望する生徒が参加する形で、私が行かせていただいたときは1年生の数学で活動させていただきました。一番回数が多かった午後の1日ボランティアでは基本的に授業支援と同じく数学の授業の手伝いをしました。授業だけではなく、数学の課題プリントの作成や総合的な学習の時間の参加、

廊下の掲示板に毎月の生徒がした活動を写真に撮ったものを張りつける等、自分の目指している教科以外では、学校の先生の仕事をさせていただけました。

この数ヶ月のボランティアから生徒のままでは感じることでできなかった先生の苦労や努力を知ることができました。また、生徒に勉強を教えるということは私が思っているよりもとても難しいことでした。自分が理解していて分かるように説明したつもりでも、相手に伝わらなかつたりしました。ではどうすれば分かりやすく教えられるか、伝えられるかを考えさせられ、自分の未熟さを痛感しました。

私が中学生だった頃は、授業中に友達と話したいから話していた記憶があります。今回行かせていただいた土沢中学校でも生徒同士で話をしていたり、勝手に席を立ったりするような生徒がいました。当時私も自分が話したいから話すというように、自分のことしか考えずにいたと思います。しかし、ボランティアで教える立場として教室にいと、そのときの授業をする先生の苦労を感じることができました。他にも課題プリントの作成や生徒のノートチェック等、授業ではない先生の苦労や努力というのは実際に体験しないと、大学の講義だけでは知ることができなかったと思います。

ある日の数学の授業で復習プリントの問題を解く時間がありました。そのとき何度か生徒に分からない問題を教える機会がありました。時間と速度から道のりを求める問題で、ある生徒に自分が分かるだろうと思っているやり方で教えても、なかなか伝わらないことがありました。その授業の後、先生に教え方を聞きましたが、それは自分が考えていたやり方よりもシンプルで非常に分かりやすいものでした。この問題に限ったことではありませんが、生徒によって教え方、理解の仕方の違いがあり、教師側もそのような生徒それぞれに対応できるように教え方というものをいくつも持っておかなければならないと思いました。また、ただその問題を

解くために教えるのではなく、生徒自身が「あっそうか」や「こうすればできる」というように気づくことができるような授業にしたいと思います。そのためには、その知識をその問題だけのものにするのではなく、次の課題でも使えるようにするための教え方の工夫ということに気づきました。

このボランティアを通して、生徒のままでは知らなかったことや、自分の課題を見つけることができました。また、模擬授業とは違い、実際の生徒と触れ合う体験ができました。このようなボランティアができることに感謝し、今回の経験をまた次へ繋げていくようにしたいと思っています。

秦野曾屋高等学校

2.1. 子どもとの信頼関係

情報科学科 4年 宮坂 涼

私は毎週水曜日に秦野曾屋高校に行き曾屋塾のボランティア講師をしました。曾屋塾と言っても主に生徒が自習をしていて、その生徒の質問に答えるというものです。

曾屋塾を通じて教えることのスキルはもちろんです。教える前の段階における大事なことに気づかされました。

大学1年生の時から個別塾講師としてアルバイトをしていて、その中でも曾屋高校の生徒を担当しテストの成績を上げた経験もあったので、テストでどんな問題が出るか、どのくらいのレベルの問題が出るかは知っていたため、効率良く教えることができる自信がありました。しかし実際に行ってみると教えることよりはるかに大変なことがあることを痛感しました。

それは子ども達との信頼関係の構築です。自習を見て回ると言うことは生徒の質問に答える、すなわち生徒の方から質問してくれてそれに答えると言うものですが、初めて行った時は全然質問してくれませんでした。質問することもなくすごいなあと思っていたのですが、しばらくしているうちに問題を解く時に手が止まり、問題を飛ばしている子がいるのを見つけました。それでも生徒が質問できないのは私達大学生に質問がしにくいのかなと思いました。生徒は曾屋塾というものがあり、大学生や社会人のボランティア講師が来ることを知っていても初対面ですし、ましてや年上です。質問をすることができるのは一部の子だけで、大人しくてなかなか質問ができない生徒が大半だと思います。それに気づいてからはとにかく見回る時に生徒の手が止まっていないうちに、問題を飛ばして

いないかをよく見て、そのような子がいたら、すかさず教えに入ることをやりました。また定期的に生徒に「何か分からないことある？」と聞き、とにかく質問しやすい雰囲気を作りました。さらには時間より早く着いた時は早めに来ていた生徒と勉強以外の話をしたりしてとにかく生徒と仲良くなることを意識しました。そのおかげもあり徐々に質問をしてくれる生徒の数が増えました。さらにフランクに話してくれる生徒の数も増えてきて、曾屋塾に行くのが教える楽しさだけでなく生徒に会える楽しさも増えてきました。

勉強を教えるというのは先生の頭が良いとか教え方が上手いというだけでは務まらないと思います。勉強以外のことで生徒と積極的に関わろうとする、自分の目の前の生徒のことをもっと知ろうとする、仲良くなりたいと思うという人間的な部分も大事だと思います。逆に生徒との信頼関係を作ってしまうと教える側も気持ち楽になりますし、教わる側も安心して教わることができると思います。

曾屋塾には教育実習や大学の授業と重なり教えるぐらいしか行けなかったのですが、教員になる前にこのことに気付いてよかったと思っています。それと同時にもっとたくさんのボランティアに参加すればよかったなと後悔しています。教育実習に行けば子ども達と関わりをもつことはできますが、それだけでは足りない気がします。神奈川大学では曾屋塾だけではなく土屋小、土沢中へのボランティアなど多くのボランティアに参加することができます。教員になる前に多くの子ども達と触れ合い、その中で様々な考え方を得るのはとても大事なことです。後輩達には多くのボランティアに参加してもらい教員として魅力の多い人間になってもらいたいと思います。

2.2. 反省点

情報科学科 4年 大月あゆみ

2014年後期から秦野曾屋高校に曾屋塾のボランティアに行きました。時間は毎週水曜の15:45～16:45の1時間、12月に入ってから、曜日はそのまま12:30～13:30に変更になりました。主に1年生の数学を担当し、その日の生徒の学校課題や問題集、テスト問題のやり直しなどで分からない点を指導するといった形になっていました。私以外に2人のボランティアがいました。生徒の人数は多い日と少ない日がまちまちです。

今期から秦野曾屋高校にボランティアに行くことになり、2年ぶりのボランティアということもあって少々緊張していました。ですが、いざ実際にボランティアを始めてみると生徒はとても純粋で接しやすく、すぐに緊張はなくなっていました。そんな中でボランティアをしていて感じたことが2つあります。

1つ目が、「私の教え方は本当に生徒のためになっているのか」ということです。私が高校生だった頃は、わからない問題があった時などは自宅でわかるまで考えて、本を何度も読み返すということをしていました。曾屋塾のようなものもありませんでした。そんな中でどうしてもわからない点があった場合は、後で学校の先生なり友達なりに聞きます。その点、曾屋塾の生徒たちは私たちボランティアにいつでも聞くことができる環境が整っています。いつでも誰かに聞くことができるこのボランティアは本当にいいのだろうか、自分で考える粘り強さがなくなってしまうのではないかと考えました。

そんな時に、ボランティアを頻繁にやっている友人を見ました。すると、生徒から問題を聞かれたとき、ヒントの出し方が私と違いました。私は、問題の解法をすべて私がやって教えていました。ですがその友人は所々生徒が解ける箇所は生徒に解かせ、上手く誘導をしてあげ

ていました。それはとても重要なことだと感じました。同時に、この曾屋塾が生徒にとって良い環境になるかどうかは教える私たちの各々の裁量であるとも感じました。私のように聞かれたらすべて教えてあげているようでは生徒のためになりません。割と当たり前のことであるとは思いますが、改めて気づかされました。

もう1つは、生徒一人ひとりの個性に気を配らないといけないということです。ずっと問題が解けないにも関わらず、私たちボランティアに「わからないです。」と言えない生徒がいました。はたから見るとわからないで悩んでいるようにも見えますし、手も動いています。ですが、どうやらそれはわからないから質問をしたということだったようです。それに私は気づかずずっと、「この子は今考えているんだな。」と思い込み素通りしていました。後々でその子はこちら(ボランティア)側からこまめに聞いてあげないと質問出来ないのだと知りました。そういった生徒も参加していることを知り、こまめな気遣いも必要なのだと感じさせられました。

今回、久しぶりにボランティアをしてみて、新しい反省点をいくつも見つけることが出来たのはとても良かったと思っています。また、2年前は中学校でしたが、私は高校の教員志望なのでそういった面からも今回実際の現役の高校生達を教えることが出来たのは非常に良い経験だったのではないかと考えています。今回出来た貴重な体験経験を今後生かすことが出来るように日々努力を積み重ねて行きたいと改めて思われます。

23. コミュニケーションの大切さ

情報科学科 4年 中尾 真穂

今回私は秦野曾屋高校へ学校ボランティアに行き、毎週火曜日の15:40~16:40に1年生と2年生の数学の勉強をみました。

今回は前期と同じメンバーでのボランティア活動であり、生徒も同じメンバーということもあって、お互いほど良い緊張感・距離間で接することができました。その中で、前期と比較したときに、教えたときの理解度や生徒の表情がよくなったと感じました。このことからコミュニケーションを図るということの大切さを身をもって理解することが出来ました。

生徒の人数は1年生が2名、2年生が1名の計3名、ボランティア員は2名で行いました。上記にも述べましたが、今回は通年のうちの後期分なので生徒との面識がある中での活動でした。そのためか前期よりも生徒からの質問が増え、且つこちら側も生徒の様子がある程度把握することができているので、アプローチがしやすかったです。

普段主に私たちがしている活動は、生徒が授業で配布されているプリントを解くための補助や、授業を終えて抱えている疑問点の解決を手助けすることです。ですが、今回は生徒がかなり良く理解していたので予習の手伝いを行いました。ボランティアの場面では初めて予習の手伝いをしたのですが、そのときに学校の進行状況がどういった具合なのか、ここの学校の生徒は何を理解していてどのような説明をすればこの内容を理解してくれるのか、既知内容をどこまで活用できるのかなど、さまざまなことを考えることができました。生徒自身も普段予習したことがないとのことで、そのためにも初めての予習で失敗してしまっただけで二度と予習をしなくなってしまうのではないかなどとても悩みましたが、生徒の目がとても輝いていたので期待に応えなければという気持ちになりました。

実際、予習しているときはとても理解しており、上手く次回の内容の問題を解くこともできていました。とてもうれしい気持ちになりました。

次の週に会った際に、授業ではどうだったか、予習した意味はあったのかを聞いてみると、とてもうれしそうな顔をして「予習したおかげでとても授業内容がわかりやすかった。また予習をしたい。」と言ってくれたので安心しました。しかしながらその後に「学校の先生の説明はわかりにくかった。難しい。聞かなかった。」と言っていたので、それは非常に反省しなければならぬ点だと思いました。

教える上でもただ生徒にわかりやすくていいだけでなく、その次の授業に繋げることができるように、また他の教員と連携が図れるように行わなければならないということも考えると、教えることは難しく、けれども生徒の純粋な表情、勉強へのやる気や喜びを見ることができると、もっとこういった表情を見ることができるよう努力したくなりました。そのためには生徒をよく理解し、あらゆる方向から教えるための知識が必要であると強く感じました。生徒一人ひとりと深く関わり合うことができるようなコミュニケーション能力を培っていきたいと思います。

2.4. 生徒に関わる人としての課題

情報科学科 4年 丸山 彩恵子

週に2回、火曜日と木曜日に秦野曾屋高校で曾屋塾の数学・物理の講師として活動しました。担当したクラスは高校1年生が中心で、有志の生徒が放課後15:45～16:45の1時間、授業の補講やテスト対策などを行いました。定期テスト期間などは12:30～13:30という場合もありました。基本的には生徒自身がやりたい教材を持ち込み適宜質問するという形式で進

行しました。持ち込まれる内容はワークか、授業内に配られた課題がほとんどでした。

曾屋塾2年目でボランティア自体最後の今回、生徒との関わり方や、生徒のつまずき、ボランティアとは何かということなど学ぶことや考えさせられることが多くありました。

まず、生徒との関わり方については、人数がこれまでより増えたことで、生徒も個性豊かな面々になり、ひとりひとりに合わせた関わり方でなければならぬということを実感させられました。①同じように声をかけても首を上下・左右に振ることで意思表示する子や、②はい・いいえで返答する子、③質問したこと以上に話してくれる子など、さまざまでした。③のケースであれば、教員側が必要以上に関わると、それ以上の発展が見込めなくなる恐れがあるので、その点で注意が必要でした。また、①、②のケースはクローズドクエスチョンにしないようにする必要がありました。負荷になりすぎないように質問の仕方を工夫して、少しでも関わる機会を持つようにしました。1回の講習で、必ず1人1回以上話すことは出来ましたが、向き合えたかは定かではありません。信頼関係を築ききれなかったことも原因です。

生徒のつまずきについては、論理的思考に関わる部分が多く、特に数学Aの試行については難しかったです。「なんとなく分かる」という程度で理解が曖昧なために、「安定して出来る」に繋がられませんでした。練習させる際に、ベン図を用いて事象の関係を考えるなどの方法をとりましたが、結局「その問題は分かる」に留まり、応用にできなかったのが実際のところでした。数学を教えるからには、数学の考える部分の面白さを伝えたいと思ってしまいましたが、生徒にとってそれが価値のあることかどうかは別の事なので教科に関する知識と技術、取捨選択できる基準を身につけることが今後の課題です。

最後に、学校ボランティアに関わった約3年間、学校教育を間近で見させていただくことが

できました。先生方が生徒のために多くの時間と気持ちを割き、生徒の成長や変化に目を向けて生徒と関わって育てているところを目にできました。私たちボランティアに対して、生徒のためになるものの延長として大変温かく見守っていただき、時にはご指導いただくこともありました。私自身、ボランティアという言葉に甘えて、自分が勉強に行く部分ばかりでしたが、先生方が大切に育てている生徒に関わる大人として、教員になる事を目指している人間として、もっと自覚をもって関わるべきであったと考えます。ボランティアというのは、自分の出来る範囲でやればよいというだけでなく、関わるからにはその責任も考えるべきであること、少なくとも生徒の今やこれからに関わる事を意識して活動すべきであったことを改めて考えさせられました。ここから、残された時間に活かしていきたいです。

まだまだ未熟ですが学校ボランティアで教わった沢山のことを、生徒に返していけるように努力いたします。3年間関わっていただいた生徒・先生方、学校ボランティアという機会を作っていただいた方々に心から感謝しています。本当にありがとうございました。

2.5. 生徒とふれあう大切さ

数理・物理学科 3年 湯地 弘季

私は、秦野曾屋高校の「曾屋塾」の講師として数学を教えました。毎週金曜日に3年生と1年生の二人を対象に活動しました。「曾屋塾」は、曾屋高校の生徒（曾屋塾参加者）が自主的に勉強をして、「生徒が分からない所を講師の人たちに聞く」というものでした。

私が「生徒とふれあう大切さ」という題名にしたのは、それが活動中に再認識した内容だったからです。次の段階では、その内容について詳しく述べていきたいと思っています。

「曾屋塾」は、「生徒が自主的に勉強をして分からない所が出てきたら、講師に聞く」というスタイルになっています。しかし、講師が上記の内容を鵜呑みにして、生徒に何か聞かれるまで何もしなくていいというわけではないということが分かりました。そう感じたのは、初めて参加した日の出来事で、私は生徒に聞かれるまで何もしないでいようと思いき最初の20分位待っていました。しかし、一向に質問されませんでした。

痺れを切らして生徒に「学校でどこの内容をやっているか」「どの部分が苦手なのか」「今やっているテキストで分からない所がないか」と聞くと、生徒から「ここの部分が苦手」「ここが分からない」というレスポンスがありました。この時私は「初対面の人にいろいろと尋ねるので難しいのだろう」と理解しました。前述の下線部のように、生徒が能動的に行動することは確かに良いと思いましたが冷静に考えると、例え前もって講師が「分からない所が出てきたら聞いてね」といっておいてもやはり「聞く」という行為自体に「勇気」が必要なのだと思います。頭では分かっていたのですがこの経験で再認識しました。これを機に生徒から色々な話を聞けたことから、生徒とふれあうことで「生徒からいろいろ学ぶことができる」と実感しました。今後も生徒と接する機会があれば自らコミュニケーションをとっていくことを心がけていきます。